

Title	圖版 女眞字銅印
Author(s)	
Citation	東洋史研究 (1938), 3(4)
Issue Date	1938-04-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/145612
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

圖版第四 女真字銅印（解說裏面）

背面女真字陰刻



印
影（實大）



女眞字銅印 ― 實は果して女眞字印かどうか分らないが、亡父が『滿洲語のはなし』の中に「私の手許に女眞字であらうかと思はれる大形の銅の方印があるが、果して女眞字であるか否か未だ決しない」と書いてゐるのがこの印で、私も少々心當りを持つて廻つたのだが未だに判決しない。然し背面左傍の陰刻は明らかに女眞字であらう——といつても實は之も年月日の記刻だといふ程度のこと分るだけで、今明確に女眞字として讀めるのは舟の字に似た「阿捏(年)」といふ字だけで、「五月 日」は明瞭だが女眞字ではない。尤も女眞字の「月」「日」の字は漢字月日の字の右側に一個の附點があるだけの相違だから、この點が見えなくなつたのだと云はれなくもない様だが、然し仔細に見てどうも點刻があつた様には思はれないし、且つ「五」の字は女眞數字として讀み様がない。「十五」を現はす女眞字として讀めなくはないが、それではこの場合意味をなさない。結局これは女眞字と漢字とを混ぜ合はせて書いた奇體のものといふことになるのだが、尙問題は「年」の上の年號(であらう)を何と讀むか、それから印面を何と讀む可きかであらう。滿洲字の印はいくらでもあるが、契丹・女眞字の印は現在まで一個も知られてゐない。こゝに示したものも前記の通り女眞字印かどうかは分らないのだけれども、背面の陰刻中に明確に女眞字を含んでゐること(この點だけでも珍重すべきであらう)から推して、漢字としては殆んど讀み得ないこの印面に或は女眞字ではあるまいかとの疑ひが多分に注がれるわけなのである。兎も角俟つところは大方の教示である。どんな經路で父の手に入つたのか知らないが、恐らく贗物ではあるまい。